
姉妹

冬瀬志保

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉妹

【Nコード】

N5968Z

【作者名】

冬瀬志保

【あらすじ】

十二月二十日。

真選組副長補佐、土方葵の誕生日。

彼女の誕生日の招待客は……。

梨栖先生とのコラボです。ご了承ください。

（前書き）

「ぶえつくしよん！」

12月10日の真選組屯所。

大きなくしやみが、部屋中に響く。

廊下の向こう側で、隊員たちが何かを祝っているのだろう、ぎやぎやあとやかましい声をたてているのが聞こえる。それが余計、頭痛を煽り、くしやみの主は布団をかぶった。

「何の騒ぎよもう……。」「

その日の朝、将軍のお膝下の街で、小さな窃盗事件が起きた。狙われたのは、万事屋という名の、いわゆる何でも屋である。決して大きな店ではなかったが、オーナーの人徳なのか、その店は不思議と人通が多い。

妙な事件だった。クリスマスまであと少しと浮かれていた万事屋従業員の酢昆布が、盗まれたというのだ。

たいして騒ぐようなことではなかったが、その従業員にしては憤慨する対象だったのだろう、すぐさま110番した。

だが、来るはずの警察が来ない。

その理由を説明するには、昨晚まで時をさかのぼらなければならぬ。

いつもは騒がしい真選組屯所も、降っている雪のおかげか、いつになく静寂に支配されている。

冬至も間近に迫り、寒さも絶頂に達していた。

歩いている廊下が冷たい外気を吸い込んでいるせいで、素足で歩く度に悲鳴を上げたくなる。

そんな屯所の局長室には、四人の人間が集まっていた。全員、黒地に金の縁を施した制服を身に着け、静かに座している。

「明日、紹介したい奴がいてな。」

沈黙を破ったのは、上座にどっかりと座っている、大柄の男 真選組局長、近藤勲であった。

その言葉が向けられた相手は、逆に小柄な少女。どちらかと言えば美少女の範疇に入っていたが、鋭い眼光を帯びている瞳孔が開いた瞳は、見る者を圧倒させる。

彼女が真選組副長補佐、土方葵である。

「紹介したい人……ですか。」

近藤の言い草が、まるで古くからの知り合いを自分に引き合わせるような感じがしたから、葵は少しかり小首をかしげた。

古くから、と言えば、武州の頃くらいしか思いつかない。かと言って、その時の近藤の知り合いを、自分が知らないはずもない。

はてさて誰なのだろうと考え込んでいると、隣に座っていた兄、十四郎が、嫌そうなのか嬉しそうなのか、言葉では表現できない表情をしているのに気がつき、葵はさらに首をひねった。

「ねえ、トッシー。トッシーが知ってる人なの？」

尋ねると、兄があまりに敏感に反応するから、驚いた。

「いや、まあ、知ってるけど……。」

顔をそむける土方と、それを訝しがる葵を見比べてから、残りの一人　沖田が、ニマリと唇の端を釣り上げる。

「知ってるも何も知り過ぎてるんでしょ、土方さん。大丈夫ですよ照れなくても。将来はあつちゃん（あつちやん）の義姉になる人なんですから。」
当たり前ながら、その後、土方の怒りが爆発した。

とにもかくにも、その晩、近藤たちは葵に引き合わせる相手を誰とも言わず、さつさと寝室に放り込んだ。

「何で言ってくれないの、ってかそもそも言わないんだったら紹介する人がいるとか言わないでよ」とグチグチ文句をつけたが、彼らは全く取り合ってくれなかった。

部屋に押し込められていじけていた葵の目に、ふと、十二月のカレンダーが映る。

そう言えば今日は、十二月の十九日。

となると、明日は……。

子供のころによく覚えた懐かしい感覚に、葵は微笑した。

誕生日と、それから、近藤たちが言っていた「紹介したい奴」。

明日はたくさんの楽しみが待っている。

そう心の中で呟き、その日は深い眠りについた。

はずだった。

が、実のことを言うと、気になる奴とやらが誰なのかわからずじまいで、男なのか女のか、自分より歳が上か下か、どんな性格なのか、なぜ兄がああいう表情をしていたのか、無限にどうでもいい疑問が頭に浮かび、眠りにつくのを妨げた。

明日になればわかる。

そうやって瞼を閉じたのは、深夜の三時。

明日という日はすでに今日になっており、当然、彼女が目覚めたのは朝の十時を回っていた。

真選組の目覚まし係が起きなかったことで、その日のスケジュールは思いつきり崩れた。

「しくじった……。」

葵は一人、ブツブツ言いながら、かぶき町の通りを歩いていた。偶然寝坊したその日が非番だったので、久しぶりに兄が自分のために買ってくれた紫色の着物を着ている。

いつ「その人」に会わせてくれるのか尋ねてみたら、近藤は思い切りはぐらかして、「夜会わせるから」と笑ったきり、何も答えてくれなかった。

冷たい木枯らしが、葵の髪をなびかせる。

身体を小さくしながら、葵は暖をとるために近くにあった書店へと入り、マンガ雑誌の所へ足を向けた。

それから、「週刊少年ジャンプ」というタイトルの雑誌を手にとる。

が、誰かの手と自分の手が重なった。

「あ。」

葵と相手の声がかぶさり、二人の視線が同時に合った。そして、相手の顔を見た瞬間、葵は目を見開く。

理由は単純明快。その人物が、あまりにも端整な顔立ちの娘だったからだ。

その娘は、美しい姿をしていた。

まるで相手を吸い込むかのように澄んでいる瞳は、宝石のような緑。栗色の髪は見事なまでの天使の輪を作り、見る者に神々しさを与えるまでに華があった。

そして、そのほっそりとした身体の輪郭を包むのは、真っ白い水仙を模った、瞳と同じ、緑柱石の色をした着物。

歳は、葵より一つ、二つほど上だろう。しかし、あまりにも彼女の纏う雰囲気が大人びていて、自分とさほど歳の差がないとは思えなかった。

「あ、えと……。」

あまりに整った顔立ちをした彼女に、葵は気押されるような思いがして、思わず「週刊少年ジャンプ」から手を離れた。

「なんじゃ……。いらんのか？」

娘が問いかけてくる。

しかし、その口調があまりに時代がかっていて、葵はすっかり「ほへ？」と間が抜けた声を漏らした。

が、すぐにいつもの表情に戻って、礼儀正しく首を振る。

「あ、はい、どうぞ。」

そう言っと、娘は朗らかに微笑んだ。

「そう。ありがとう。」

葵はぺこりと頭を下げて、娘に踵を返し、ふうと息を吐いた。娘のそばにいて、なぜだかわからないが緊張した。

けれど、そんな状態がゆるんだのも一瞬のことで、

「のう。」

娘に声を掛けられ、再び肩に力が入る。

「はい。……何でしょうか。」

ぎこちない動きで振り向くと、「ジャンプ」を大事そうに抱えていた娘が、疑問を抱くような瞳で、じいっとこちらを観察しながら尋ねてきた。

「そなた……。どこぞであつたか？」

今度は、葵が疑問に思う番だった。

しばらく話しているうちに、二人はだんだんと打ち解けていった。恋歌と名乗る容姿端麗な娘は、最初、葵の名字を聞いて「私の知り合いにもその名字を持つ奴がある。……ようわからん奴じゃ。」などとはぼしていたが、すぐに「葵殿のことではない。」と慌てた。その慌てぶりが何とも言えず、葵は、なんて可愛い人なのだろう、と心の中でくすりと笑った。

かぶき町の大通りを歩きながら、葵が買ったコンビニの「からあげちゃん」を頬張り、恋歌は懐かしむように目を細めた。

「しばらく京におつてのう……。最近、その『土方』と再会を果たしたんじゃ。」

そう言ってから、十字架を飾ったネックレスを愛おしげに眺めたと、葵はそのネックレスに見覚えのあったことを思い出す。そう、どこかで見たはずなのだが。

「……その土方さん、どんな人なんですか？」

訊くと、恋歌は少し嬉しそうな表情をして、すぐに無表情になると始めた。

「ぶつきらばうで意地悪で、なんだかよくわからん奴……。」

答えになってないですよ、と笑って言うと、恋歌は顔を赤くして黙ってしまった。

少しの間、沈黙が降臨するが、やがて、唐突に恋歌が切り出した。

「ところで葵殿。少し付き合ってもらいたいのだが、良いか？……」

ちよつと、これから会う人に、贈り物をしたくてな。ちよつと葵殿と同じ年ごろの女子じゃから、趣味も合うじやろつ。」

その言葉に、葵はにこりと笑った。

「もちろん。」

そんな葵に、恋歌も顔の赤らみを残しながら、微笑を返した。

「ネックレスか指輪かイヤリングか、はたまたブレスレットか……。」

悩む。」

大江戸デパート。江戸中、どこを探してもこのデパートほど大きな百貨店は存在しない。

そんな大型商店に、真剣に苦慮する恋歌の呟き。

葵は苦悩するような顔をした恋歌に、そつと声をかける。

「恋歌さん。心がこもっていれば、貰う人はそれだけで嬉しいと思いますけれど。」

「いやしかし！」と恋歌は拳を握り締め、叫ぶ。「奴の妹となると手は抜けん！嫌われたりしたらお終いじゃ！」

「すみません恋歌さん、落ち着いて下さい。人見えます。」
が、注意されても恋歌の勢いは止まらない。

「故に絶対に嫌われてはならん！奴の妹がどんな趣味してるのか調べておけばよかったあ！」

「だから落ち着いて下さいって！心こもっていれば何でもいいんですって！」

「……そういうものか？」

「そういうものです。」

自身に満ちた葵の返答に、恋歌はふむと首肯した。

「そうか……。なら、苦慮して選んだものなら、どれでも受けとってくれるのか。」

葵は、それを聞いて微笑む。

「あたしだったら、喜んで受け取りますけれど。」

その答えに満足したかのように、恋歌は「決めた！」と言って一つのペンダントを手にとった。

それを見て、葵は思わず言葉を漏らす。

「可愛い……。」

恋歌が選んだ、薄い紫の蝶々を模ったその首飾りは、自分と同年の少女にはよく似合いそうなものだった。恋歌が人に送るために選んだもののなに、自分が欲しいとまで思ってしまう。

「そ、そうかのう……。」

恋歌は自分の選択が良いものだったと知り、少し照れたような表情を見せた。

「はい！きつとこれを受け取ったら、喜んでくれますよ！」

葵の言葉を聞き、恋歌は微笑む。

「……買い物をすませようか。」

そう呟いてから、二人はレジへと向かった。

デパートを出ると、もう既に日は傾き始めていた。太陽は地平線に飲み込まれかけていて、完全に姿を消したわけではなかったが、すでに上空は深海のような濃紺に染まっていた。

「……すまなかったな、こんな時間まで付き合わせてしまつて。」

「いえ、自分は恋歌さんといれて嬉しかったです。」

妙齢の女子二人が、河川敷をゆくり歩きながら言葉を交わす。

「また会えるときよいのだが……。私は京に異動されていてな。今日と明日だけ、上司に知り合いの妹の誕生日だから、といわれて呼び戻されたんじゃ。近いうちに再会は難しいかもしれない。」

「……そうですね。」

葵は残念そうな顔をするが、やがて、

「でも、きつと会えますよ！本屋で偶然同じ本を手にとつた、って、なんかよく運命的な出会いの時に使われるじゃないですか！」

明るい声を出してそう言った。

葵の愉快そうな表情に、恋歌もつられて微笑んだ。

「そうだな。……いや、きつとそれに相違ない。」

しばらく、そうやって二人は河川敷をぼうつとしながら歩いていた。地平線に目をやると、すでに太陽は沈んでいる。残光も、もうない。あたりは、静寂に包まれた。

と、その時。

「葵い！！」「あっちゃん！」「葵くん！」

聞きなれた三つの声に、葵は前方に目を凝らした。

そして、「トッシーたち！」と目を見張る。

が、驚いたのは、兄たちの存在だけではなく、隣にいた恋歌までもが、「局長！」と叫んだからだった。

「……え？」

二人とも顔を見合わせ、瞬きする。

状況が、理解できない。

「あれ？もしかして二人とも、すでに知りあい？」

葵たちに追い付いた近藤が、間抜けな声を出す。

「いや、知り合いつていうか……。」「今朝、知りあつたんじゃが……。」

葵の言葉を恋歌が継ぐが、その態度は、暗闇の中から土方が現れてから、ぎこちないものになった。

土方も、予想外の出来事だったのだろう、「げ。」という顔をしながら、顔をそむける。けれど、その顔には嫌悪の表情はなく、逆に照れているようにも見えた。

「えと……。葵殿はもしかして……。」

土方からいったん目を話した恋歌は、上擦った声で尋ねる。

葵はハツとしたように顔をあげ、ようやく理解できたような顔をした。

「近藤さんが言ってた『あわせたい人』って……。恋歌さん？」
それから数分間、何とも言えない沈黙が流れた。

その晩の真選組屯所は、いつになく騒々しかった。

一つは、真選組の「救いの副長」が誕生日を迎えたこと。

そして、もう一つは、その副長と、「神速の女王」が顔を合わせたことだった。

「いや……。まさか葵殿が義妹……。じゃない、土方やっの妹だったとは……。」

恋歌が呟くと、今度は葵も独りで言う。

「トツシのお嫁さんがねえ……。うん、こんな綺麗なお人形さんのような人だったとは思いにもよらなかった……。うん、てっきり

キューピー嫁に貰うかと思ってから。」

「貰わねーよそんな嫁。ってか今の言葉撤回しろ。」

兄の鉄拳が頭を直撃し、葵は苦悶の声を漏らす。
が、なぜだか恋歌は顔を真っ赤にする。

ふと、思い立ったように持っていた鞆の中を探り、葵に一つの包みを差し出した。

「中身はもう知っておろうが……。誕生日、おめでとう。」

包みを受け取ると、葵の表情がだんだんと明るくなっていく。急いで兄の拳から逃げ出してから、葵は包みを開けた。

「……ネックレス!!」

中から現れた首飾りに目を輝かせ、葵は「いやったああ!」と叫びながら屯所の中を喜びのあまり駆けまわる。そして、中庭を百周くらいしおわったあと、恋歌の前に戻ってきた。

「あの、付けてくれませんか!？」

最初、葵の喜びように呆気にとられていたが、すぐに恋歌は微笑むと、葵の掌におさまっていたネックレスを、彼女の首にかけてやった。

葵は満面の笑みを浮かべて、恋歌に向って礼を言う。

その二人の姿が、まるで姉妹のようで。

それ以来、葵と恋歌は、真選組の隊員たちから「あの姉妹」といわれるようになった。

無論、土方が嫌なのか嬉しいのか、よくわからない表情をこの二日間浮かべたのは、言う間でもない。

そして。万事屋の従業員が翌日、真選組に乗り込んできたのはここだけの話。

（後書き）

今日は冬瀬の「土方葵の真選組日誌」のヒロイン（らしくないヒロイン）・葵の誕生日でした。

という訳で、勝手に私が梨栖先生に頼んで書かせてもらい……。

自分で言うのもなんですが、素敵なお話を書けました！！

梨栖先生、本当にありがとうございました！！

「銀魂」出勤！！真選組」

<http://ncode.syosetu.com/n2110j/>

「銀魂」集合！！真選組」

<http://ncode.syosetu.com/n6438m/>

こちらが、梨栖先生の須藤恋歌ちゃんの物語です。

「銀魂」美しき蜘蛛の巣にかかりて」

<http://ncode.syosetu.com/n0531q/>

「銀魂」美しき蜘蛛に睨まれて」

<http://ncode.syosetu.com/n6456v/>

こちらも梨栖先生の、「うつくも」シリーズでございます。

本当に素晴らしいので、この四作、ぜひ「一読下さい」！

そして最後に。

葵、誕生日おめでとう！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5968z/>

姉妹

2011年12月20日15時50分発行